

---

# 英雄達の恐怖劇

緋色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

英雄達の恐怖劇

### 【Nコード】

N16480

### 【作者名】

緋色

### 【あらすじ】

この小説は魔法先生ネギマ！と

アダルトゲームDies irae acta est fab  
ula のクロス作品です

その他にもFateを予定（テンプレ転生者の能力）

転生者は三人

最強転生者（気分屋、Diesの聖遺物）

テンプレ転生者（原作破壊、無限の剣製）

最低転生者（エヴァンジェリン、真祖）が登場する予定です。

いわゆる二次創作の王道？です。

ちなみに素人が書く素人の小説です  
過度な期待はしないでください。

ぶっっちゃけ転生者三人はかなり強いです。

最強はDiesの聖遺物全部使えるし  
テンプレはUBWだし  
最低は接近戦、魔法戦共に磐石だし。

主人公を急遽変更

ネギ、転生者三人にしようと思います

てか特に決めてないんです・・・

## プロローグ「深淵」

ゆらゆらと

たゆたう闇に一つの光

俺 新堂 光は悩んでいた

まず第一に俺は普通にベットに寝転がりそしてすぐここに来た  
つまり寝た記憶が存在しない事

そして第二にいままではいつも感じていた肉体の感覚がなく自身か  
ら溢れる光が自身だと認識していること

そして第三に

この、脳に語りかけてくる声だった

まったくもって意味がわからない

何故意味がわからないかと聞かれれば単純だ

なぜならばその言葉はおよそ人間では理解が及ばないものだったか  
らだ

ここは死後の世界か？とも思ったが自身が否定する

なぜなら俺はまだ生きている、というより

死んだと認識できないのだ

そもそも死とは認識できるのかどうかすらわからないが、とにかくわかるのだ

ここは、未だに死んではない

むしろ

「やあ」

と

思考の海に沈みかけていた自身にようやく声がかかる

声のほうを向く（自身の肉体を認識できていないのに向くとは表現が可笑しいが）

そこには

少女がいた

否、ソレは少女の外見をしているが

なにかが、違う

そう、俺は直感した。

「・・・君は、なんだい？」

そう俺が確認すると彼女は笑った

「フフフ・・・僕に

お前は何者だ？とか

お前は誰だ？とか問いかける人間はたくさんいたけど

お前はなんだ？と問いかけたのは君が初めてだ

新堂 光君

俺の名前を知っている？

いやまでそれ以前に

「ここには他の人間も来たのか？」

「うん、いろんな人が来たよ？」

破滅願望、英雄願望、支配願望

いろんな願望を持ちそれを極大にまで肥え太らせた”愚者”たち  
僕はなにかと聞いたね？

僕は 神だ」

神、神ときたか

俺は別段驚きもせず

「そうか、神か」

そう、認識した

「おやおやおやあ？

疑わないのかい？と聞いたところでしたしかに君からは疑いの感情を  
感じないな・・・

君、あやしいとか嘘だとか思わないの？

だって神だぜ？自分で言うのもなんだけど神なんてなんかすつごく  
陳腐で嘘ッばくない？」

たしかに俺の世界に神は存在しなかったかもしれない

でも

「ここに神がいなかどうかは知らないからな

未知を常識で決め付けるのは、バカのことだ」

そう

ここが俺のいた場所ではないことはなんとなくわかる  
俺のいた世界とは認識がズれている、なぜかはわからないがそう感  
じるのだ

「・・・フ、フフフ

ああ、君は本当に逸材かもしれないな」

そういつて彼女は嗤った、それはもう暴虐的に

「うむ、この神であるところの僕が  
君の願いを一つだけ叶えよう

そして、君を違う世界に飛ばしてあげよう」

いきなりだった

脈絡もクソもあつたものじゃない

それはそうだ、なぜなら彼女は最初から俺と会話などしていない  
俺を観察していただけ

ここで初めて彼女は俺に話しかけてきた

「願い・・・か？」

「うん、君の願いを教えてください？」

そうだな、神に願いをか・・・



「俺の願望を教えてください  
我が人生で唯一の謎」

そう、いままで生きてきてもっとも不思議に思い  
そして終ぞ知ることの出来なかったモノ

「いいだろう、だがそれは自身で見つけなければ意味がない

だから、君にはあらゆる他者の願望を与えよう

君が手にするものはあらゆる者の願望を具現し顕現し操る武装だ

そうして最期には

自身の願望を見つけ出せ

「ああ、わかった」

「君が行く世界には他にも一人ほど君と同じ存在がいる

ただまあ・・・」

君の格には届かない

「・・・そうか、ならば」

その者達にも、願望を聞いてみよう

そうして俺は聖遺物を手に取りネギマ！の世界に飛んでいった  
聖遺物のかつての使い手の記憶と渴望を得て。

「さあ、今宵恐怖劇は幕を開ける

この座に再びまみえるのはいつになるかな？

最強の魂に勝てるか？二対の魂よ

正義と悪よ、君達は敵うのかな？

あの 「

無の魂に

「一人は英雄願望」

世界を走り世界を救う、正義の味方

「一人は支配願望」

世界を弄び、少女を呑まん、背徳の王

そして

「一人は」

傍観し観測し、世界を回す、  
デウス・エクス・マキナ  
機械仕掛けの神

プロローグ? 「正義の味方・エミヤ」 (前書き)

英雄願望の転生者<sup>テンプレ</sup>のお話

彼は紅き翼のメンバーです、テンプレだね

プロローグ? 「正義の味方・エミヤ」

魔法世界、戦場跡

燃え盛る炎

突き刺さった武器

空は赤銅に焼けて、彼の者は一人勝利に酔う

すべてを殺戮し

すべてを破壊しつくした、英雄

「剣の王」「赤騎士」「赤き弓兵」など数々の異名を得た英雄は

戦場で一人涙を流す

「また、救えなかった・・・」

どうして、どうしてだ？

どうして俺はなにも救えない

力もある、覚悟もある、理想もある

彼の英雄の力を持ち、理想を持ち

それでいてなぜ、俺はなにも救えない？

泣いてる子供を救えず、手足をもがれた人も救えず、死してなお獣として使役される者も救えない。

俺は、殺すことしかできない

何故、なぜ、何故、なぜ？

自らに幾度問いかけようと正解はなく、また自らすら救われない

目の前で散っていく命に涙し

この手で殺した命の数だけ血で穢れ

この目で見えてきた悲劇の数だけ心は磨耗し

この掌で掴んだ命すら、戦場で散らせてしまっ  
愛した女性すらも

「レイラ・・・」

体は剣で出来ている／我が身は剣

血潮は鉄で、心は硝子／我が心は血涙を流し

幾たびの戦場を越えて不敗／我が魂は敗北を良しとせず

ただの一度も敗走はなく／ただの一度も敗走は許されず

ただの一度も理解されない／ただの一度も救われぬ

彼のものは常に独り、剣の丘で勝利に酔う／彼のものは常に孤独、  
墓標の前で涙を流す

故に、生涯に意味はなく／故に、我が命に意味はなく

その体は／その魂は

きつと、剣で出来ていた



プロローグ？「正義の味方・エミヤ」（後書き）

短い・・・次回は最低（予定）の転生者のプロローグ？

プロローグ? 「背徳の王・クラム」 (前書き)

最低系転生者です

プロローグ？「背徳の王・クラム」

とある町

夜の闇に包まれた町

だが

この町には生気が存在しなかった。

教会は神父の血で溢れ

民家はまた新たな血で溢れ

広場は狂った背徳の宴の場と化している

すえた臭い、嬌声、怒声、罵声

現実を直視しきれず壊れていく人々

はたして彼らを襲撃した賊

だが

この賊たちも生気がない

瞳は光を失い、ただただ腰を振る機械のように

一心不乱に女達を犯しつくす

「もっと、もっと、侵せ、冒せ、犯せ

侵害し冒し犯しつくせ

そうすりゃもっと楽しめる」

ククク

とこの騒ぎの元凶

クラム・ローゼンクロイツ

「闇の主」「薔薇の騎士」「白騎士」

そして 「背徳の王」

数々の魔名を持ち、あらゆる罪を犯しつくし

そしてなお、人々を恐怖に陥れる者

「・・・飽きた」

唐突に

「ダメだ、飽きた

お前らとりあえず死ね」

” 闇の舞踏 ”

瞬間

彼の背後から闇が溢れ出す

光を失い、正気も失った男達は吞まれ

光を失い、理性を失った女達も吞まれ

闇は全てを食い尽くした

「ハア・・・めんどくせ」

なぜだろう

どれだけの悪行を行っても

どれだけの人間を支配しても

なぜ我が渴きは癒されぬのか

「なぜだ？なんで俺の渴きは癒されない

支配し死配し屍配しても、俺は満足しえない？」

俺の願望は支配願望

闇を連れ、夜を連れ

全てを奈落へ誘う 漆黒の吸血鬼

そんな存在になっても

「俺の渴きは・・・癒されない」

彼の渴望は満たされること

だが支配することではしか満たされない彼

彼の宿命は皮肉にも

” 決して、願望が満たされない”

それこそ彼の宿命

故に 彼は悪には成りきれない

「ならばいいさ・・・人間を支配しても満たされないなら

同じ吸血鬼を支配すればいい、それで満たされるはずだ」

なんたる皮肉か

それができれば彼は必ず満たされる

だが

悲しいかな、彼の心は満たされない

どこまでいってもガランドウ

真祖の吸血鬼になろうと、どうしようという意味がない

「ならば・・・英国か？いや暗黒大陸か」

悪いが、不死の子猫ちゃん

支配させてもらうぜ？

「悪く思つなよ、まあ籠絡くらいにしてやるぢ」

あんなガキ、無理に支配することもないしな

ああ

悲しいかな彼の望みはかなわない

機械仕掛けの神は世界のバランスを取るもの

世界の運命を決めるもの

そんな彼が、子猫に介入しないはずがない



「残念だ、彼女には期待していたのに」

と、機械仕掛けの神は嘆息した

ブローグ？」「背徳の王・クラム」(後書き)

あれ？

なんか最低系というより最悪じゃね？

## 第一話「英雄の息子」

「ここがマホラかぁ・・・広いなあ」

花も恥らう乙女の花園

そんななか一人浮いている少年

「でも・・・うん、がんばるよアーチャー」

彼こそ彼の英雄、最強の魔法使いと謳われたナギ・スプリングフィールドの息子

ネギ・スプリングフィールドである。

なぜ彼が乙女の花園である麻帆良学園都市の最奥、女子校エリアにいるのかといえば単純

彼は麻帆良学園本校女子中等部2-Aの担任となるからなのだが・・・

「JJJJ・・・JJJJ」

彼はいかせん俗世に疎かった

ぶっっちゃけ迷子である。

イギリスのウエールズという田舎町から出たことがない彼にとって  
麻帆良の町は広がった

というか広すぎる

学園都市ってなにさ

学園で都市ってどんだけでかいんだよ

そうしてフラフラ彷徨ってると。

「あ・・・」

桜の木の下で

彼は美しき乙女と出逢った。

背は高く、整った完璧な身体

まるで女神の祝福を受けているかのような

白銀の髪を揺らし、その金色の瞳はなにを映しているのか

憂いを秘めた表情、そしてなによりもその纏う空気

時よ止まれ、お前は美しい

ネギはそんな台詞を思い出した

あれはたしかなんだったか・・・

そう

ファウスト博士のこの世の美しさを称えたセリフだったか  
だけど

ネギにはいまこの瞬間

彼女こそ世界でもっとも美しいと思えたのだ

「あら・・・?」

ハツとする

彼女に気づかれたようだ

ネギはすぐさま彼女に駆け寄り

「あ、あのっ・・・ごめんなさい!ジロジロ見てしまっ!」

必死に頭を下げるネギ

怒られないかな・・・?

と内心冷や汗のネギだったが

「いえいえ・・・良いのです

見られることには慣れてはいませんがよくあることですから

と微笑みながら

「しかし、淑女をあまり不躰に見てはなりませんよ?

貴方は綺麗な容姿をしているのですから、不用意に淑女を虜に  
してしまいます」

カアツと顔が熱くなるのがわかる

「す、すいません！ぼ、僕が綺麗だなんて・・・貴女のほづが綺麗です！」

ネギは名誉ある英国紳士である

女誑しの血を引いているが

「まあまあ、お上手ねボウヤ

でも此度の邂逅はここまで」

え・・・？

彼女は微笑を崩さぬままにそう告げた

瞬間ネギに悪寒が走る

「いずれ、その身が英雄となるとき再び会いましょう」

ふわり

と彼女は消えていった

「・・・？なんだったんだろう」

英雄と彼女は言った

でも

「僕はきつと、英雄にはなれません」

だって

英雄の末路は僕がよく知っている

アーチャーは言っていた

みんなを救いたくて英雄になっただけ

英雄になってしまつと視野が広がつてどうしても助けられない人が  
いる と

黒白の双剣を携え赤い外套に身を包み、鷹のような鋭い眼で遠くを  
見つめる彼に。

僕は最初は憧れた、でも

「ネギ、英雄とはな

世界の奴隷なのだ、戦乱が起これば解決し

天災が起きれば人々を救い

世界の存続に貢献する、そして敗北は許されない



いいか、ネギ

お前は英雄など目指してはならない

自分の心で自分の生きる道を定めなさい。』

彼は言った

英雄などなるものではない、と

でも僕は父さんやアーチャーみたく誰かを救いたいと思うのだ

きっとアーチャーは僕を偽善者だと言っだろう

でもそれでいい

英雄はアーチャーのようなすべてを救おうとする人

英雄は敗北してはならないもの

英雄は人々を救わなければならぬもの

ならば

僕はやっぱり英雄にはなれない

だって僕が救いたいのは

「おーい！」

あ、

「タカミチー！」

こうして

彼、ネギ・スプリングフィールドは教師となる

そして はからずも、英雄の道を進んでいくことになる

その裏には

第一話「英雄の息子」(後書き)

10月12日、改訂

## 第二話「姫と王子の邂逅」(前書き)

原作沿いながらのまったく違う話になりそうです

## 第二話「姫と王子の邂逅」

どうしてこうなった

それがネギの心情である。

抱きかかえているのは自らより少し大きい少女

少し髪は長いが可憐な容姿をした少女 宮崎のどか

そして、流れるような茶髪を二つにまとめ

色の違う美しい瞳を見開き口をあんぐりと開けた少女 神楽坂明

日菜

「あ、あのっ！こ、コレは・・・」

ネギはとっさに弁解しようとする

だが悲しいかな

女子中学生に空気を察せと言えばまあできなくはないが

「こ、これって・・・あ、アンタ！」

悲しいかな、彼女はいかんせん頭のデキが悪かったのだ

「うっ・・・うっうあぁ！！記憶を失えええええええええええ！！！」

もう一度強く思った

どうしてこうなった・・・

ネギは一日を回想してみる

迷子になり綺麗な女性と出逢いタカミチに見つけてもらい

異様に後頭部の長い学園長と話し

住む場所がうんたらかんだらで神楽坂明日菜とモメ

教室に入れば畏にかけられそうになり（全部かわしたが）

いろんな綺麗な可憐な女性達にモミクチャにされ

そして目の前で階段を踏み外した可憐な少女を思わず魔法で助け

そしていまこうなっている

バンツ！

そうして神楽坂明日菜の服は飛び散った

状況は加速した！

「なにすんのおゴルア！！」

なんだかよくわからないうちに裸にひん剥かれたと実に短絡的に思い立った彼女はスケベでおませな憎たらしいクソガキに鉄拳による制裁を加えようとズンズンネギに迫っていく

そこに

彼女 神楽坂明日菜の慕うタバコが似合うオールバックのダンデ  
イズム

高畑・T・タカミチ登場

さらに状況は加速した！

「・・・熊・・・だどっ!？」

結果

「アンタ魔法使いなんだ」



初日で魔法がバレることになると言っわけです

そんなこんなでまたさらにいろいろあった

タカミチの心を覗けだの、惚れ薬を作れだの

「大変です・・・僕はたぶんイギリスに帰ったらまずアーチャーに殺されます」

いつもの弓にイイ笑顔で

『ネギ？言っただはざらろう』

魔術をむやみに使うなと

そんな簡単なことも守れないお前にはコレをプレゼントしてやる』

そういつてあの擦れた矢を寸分の狂いもなく打ち込んでくる・・・

ネギは戦慄していた

だが悲しいかな、彼の弓兵はこう思っていた

『あのトーヘンボクでオンナツタラシのネギが女を巻き込まないは

『  
ずがない』

だが悲しいかな、お前が言うな、である

。

### 第三話「満月の夜に」

「ハア……」

少しぼろぼろになった木製の体より大きな杖を背負った少年

ネギは自己嫌悪に陥っていた

「初日からとんでもない失敗ばかりしてます……これじゃアーチヤーに本当に殺されかねません……」

魔法はバレるし女性の服を脱がせてしまうしおまけに他者の読心だ

断じて魔法使いの行いまして誇りある英国紳士の所業ではない。

「でも……」

いろいろあったけど、それでも明日菜さんは優しい

それがネギの神楽坂明日菜に対する印象

我が侂で意地っ張りですぐに暴力を振るうけど

心は暖かい、そんな

母のような女性だと、ネギは思った

母なんて知らないのに、でも

「きつと・・・ネカネお姉ちゃんと根が似てるんですね」

いつも我が身を案じ、愛してくれている従姉の姿が脳裏に浮かぶ

アーチャーは過保護だといつもネカネお姉ちゃんと喧嘩してるけど

と、一人苦笑していると

「・・・アンタ、なに一人で笑ってるのよ」

ビクリ

ふと頭上から剣呑な声

「明日菜さん！す、すいません！」

起こしてしまったかと思い謝罪するネギ

「フン・・・いいのよ別に、ただ私朝早いからアンタもさっさと寝なさいね」

不機嫌そうにいう明日菜にネギは

「ハイ、スイマセン・・・」

こうして夜が更けていく

ああ、そういえば

今夜は月がとても綺麗だ。



麻帆良学園桜通り

美しく柔らかな満月の夜の下

「・・・やっぱりこの道は慣れないわね」

一人の少女が歩いていた

制服を着ているようなので学生だろうか

こんな時間までどこで何をしていたのだろう

「全く・・・こんな時間まで縛り付けてあのハゲ・・・夜まで説教  
つて本当に教師なのかしらあのハゲ・・・」

彼女の言ってることはもつともだった

夜 すなわち闇の世界に幼い少女一人で放り出すというのは教育  
者としてはいささか問題だ

だが



その常識を覆すほどにこの麻帆良の治安はいいのだ

そもそもこの女子校エリアは麻帆良の最奥というのもあるが

不審者なんていないのである

それもそのはず

麻帆良女子校エリアには二人の怪物が存在する

一人は広域指導員”デスメガネ”こと高畑・T・タカミチ

彼にかかれば不審者など一瞬で追い返されるだろう、まさしく一瞬で

そしてもう一人

この麻帆良の闇である歓楽街エリアの支配者

”UG”

そしてそのUGが誇る私兵たる”黒蛇”

彼 UGは麻帆良学園都市でおそらくもつとも浮いているエリアである歓楽街エリアの創立者であり支配者である、

この歓楽街エリアが出来る際あらゆる学生達の親族から反対がでた

という、

しかしUGの反論はこうだった

『この麻帆良には大人たちも大量に存在するのですよ？

そしてこの町には大人たちの娯楽が存在しない

これではいけない、これでは麻帆良の治安は悪化の一途を辿ります』

彼の言い分はもつともだった

人は娯楽を求める生き物だ

娯楽は人それぞれだがもつとも単純で強い娯楽は快楽である。

酒、娼婦、男娼、薬、賭博

UGは麻帆良には娯楽がなさすぎるといったのだ

だが人とは娯楽がなければ窮してしまう生き物だ

仕事で満足できる人も多いだろう

だがそうではない人間もまた多いのだ

そんな人間達が抑圧された欲求を満たすために走る行動とはなにか？

自身らで娯楽を作ってしまうのだ

それも、整備も道徳もない空間を

そんな空間が作られる前にどうせなら自分達で管理・監督する娯楽の町を作るべきと言ったのがUGだった

そしてそんな彼の論を聞き麻帆良学園学園長、麻帆良学園都市最高責任者である近衛近右衛門の承認により歓楽街エリアは作られた

そして麻帆良の治安はそのときから年々良くなってきている

それもそのはず歓楽街エリアの支配者UGは麻帆良の治安を考え歓楽街エリアを作り出したのだ

そんな歓楽街エリアで問題を起こせばたちまち彼の私兵達である黒蛇に追い出され警察に突き出されるのである。

だが

そんな治安が良い麻帆良だが

今宵、満月の夜は話が違った。

バサッ

「なにかしら・・・？コウモリ？」

上空を数匹のコウモリが通り過ぎる

内心すこし不安だった彼女にとって物音が蝙蝠というのは多分な安心を与えた、

だが

「悪いが、貴様の血を貰う」

ゾクリ

背筋が凍り、空気がスツと湿りだす

「・・・え？」

ガブ

自身の首筋に少しの痛みを覚え

彼女の意識は闇に落ちていった。





「・・・」

満月の夜の下

襲撃者      エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは立ち尽くして  
ていた

「マスター、警備員達がこちらに向かってきます離脱を」

己が従者      茶々丸の言葉にも耳を貸さず彼女は月を凝視する

「マスター？」



茶々丸は不審がるがそれもすぐに消える

己は主の道具であり主の仲間ではない

故に主の行動に異議など挟まない

それでこそ正しいと科学技術の結晶である茶々丸にはそう刷り込まれている

そんな彼女に

「フ・・・茶々丸、正しい従者の在り方とはな

時に主の行動に異議を挟みまた新たな視点を与え

それでいて自らの主を敬い裏切らず、なにをもってしても主を想う

それが正しい従者だ、わかったか？茶々丸」

月を見ながら語る主に

「イエス、マスター」

従者は自らに記録していき

また人に近づいていく

それは神の領域だ

人が人を生み出す、というのは最早霊長の領分ではなく、それは

「悪魔の所業、懐かしいな

こつも月が紅いからか？

ああ・・・憎いなあ、我が主」

エヴァンジェリンは紅い月を恍惚の表情で眺める

そう

従者は主を裏切らない

では主は従者を裏切らないのだろうか

かつて四百年前

自らを裏切った主の姿を思い浮かべる

狂気の微笑み、敵を惨殺する所業

その白貌、銀髪と紅い瞳に見られればたちまち畏怖を示してしまう  
ような美しい人

凄烈で残虐でなにもかも吸い尽くして、薔薇の夜に君臨していた美  
しき鬼

そして、己の存在を唯一認めてくれた愛しい主

だが

「裏切った、裏切ったのだよ茶々丸

かつての我が主は私を裏切ったのだ

そう、あの時もこんな風に、月が紅く赤く燃えていた」

「マスター？」

茶々丸は驚愕していた

初めて見る己が主の激情に

ここまで強い憎悪を浮かべる主は初めてだった

あるいは それは愛とも呼べるのかもしれない

「行くぞ、茶々丸」

そういつてエヴァンジェリンは月を見るのをやめ

「イエス、マスター」

茶々丸はそれに追従する

「今夜はいい夜だ

こんなに月が紅い夜には」

自身の背に紅い満月を背負いながら少女は飛ぶ

その可憐な貌は

「貴方の血が恋しくなってしまうわね」

かくも凄烈に美しく歪んでいた。



まだだ、まだ早いよ吸血姫

君を付け狙う犬畜生がやってくる

なに、安心するといい

俺にそっくりだから君もきつと気に入るさ

役者は少しずつ揃ってきたとも

さあはじめよう、喜劇を終わらせるための英雄譚を

そうして 怒りの日を待とうじゃないか

俺の中の獣を目覚めさせてはくれないか？

ネギよ

### 第三話「満月の夜に」(後書き)

あれ・・・？

次回予告でネギの過去をやるって言ったのに幼女の話・・・

ネギの過去じゃなくて幼女の過去じゃんこれ

前話の次回予告改訂しました；；



#### 第四話「歓楽街の支配者」

「よろしいのですか？」

暗い闇に満たされた室内

「なにかまわぬさ、今宵は美しき満月の夜

そんな魔物達の時間だ、彼女もハメを外したくもなる」

ワルプルギスの夜

そう言つて凄惨に微笑んだ男は

まるで枯れ木のような男だった、

髪は艶を失い体は細く、瞳は昏く

だがその声は全てを誘つような甘い音色で

まるで 毒を持った木のように

そんな男に跪き声を交わすは一人の女性

「ワルプルギスはジョン・ウーの誕生日に行われるものですよ、マスター」

「何故B級映画の巨匠を出すんだ？」

こちらは男とは違いまさしく優美な華のような女だった

その髪は烏の濡れ羽、瞳は漆黒の宝石のように白い素肌にあいまつてよく映えていた

だがどうだろう、豊かな肢体

誘蛾のごとく男を誘うその色香

だが彼女には 棘があるだろう

そういう危険な香りのする女性だった

いわば 毒を持つ薔薇

「ともあれよろしいのですか？彼女の襲撃はこれで……」

「よいと言ったはずだが？」

男 ” U G ” は言う

麻帆良学園都市・歓楽街エリアの創立者にして支配者

曰く”麻帆良の闇”と呼ばれる男は言う

「彼女には自由にさせる

女子生徒を何十何百何千襲おうと

我々に齒向かおうと自由だ

わかったか？カーミラ」

それに対し女 ”カーミラ” は答える

「イエス・マスター

出すぎた真似を致しました

罰は如何様にも」

カーミラは跪きながら主に許しを乞う

「そうさな一つ頼みたいことがあってな？

なに、そう難しいことではないよ

ただ

そこで言葉を切りUGは口の端を吊り上げ

「下手を打てば死ぬがな」

カーミラはただただ跪きながら

「如何様にも、我が心は主のモノ

我が肉体は主の翼に、我が精神は主の瞳に

我が魂は主の糧に、どうぞ命じてくださいます」

そんなカーミラを見て

UGは微笑みながら

「ネギ・スプリングフィールドとエヴァンジェリン・A・K・マク  
ダウエルを邂逅させよ、ただし姫君の逆鱗には触れるな  
また翁の目に触れず耳にも届かず、闇に紛れ光を壊し

必ず我が許に戻れ、我が従僕」

ああ

ああ なんともつたいなきお言葉か

「イエス・マスター」

カーミラは万感の想いを胸に抱き主の命を実行するべく闇に溶けて  
いった

「まあ二月ほど準備はするだろう」

さすがに翁の目にも耳にも届かないというのは骨が折れるしな

あー・・・この喋り方めんどいんだよな

まあ・・・いいか」

カメラが消えた室内でUGはため息をつき

「楽しみだな」

と言って

嗤っていた。

## 第五話「少年少女・姫君の輝き」

### 図書室

本の独特の香り心地よい静寂に包まれた場所で

少女は悩んでいた

「はあ」

私は思わずため息を吐く

昨日はとんでもない失敗をしてしまった

本を抱えすぎて階段から落ちるなんて

なんて、無様なんだろう

それをさらに十歳の子供に助けられてしまった

いや、より正確に言うなら先生なのだろうけど

正確にというより十歳の先生というのはおかしいけどまあ

「ここは麻帆良だし、しょうがないのかも」

そう、ここは麻帆良だ

根も葉もない噂、根も葉もある実話、根も葉もわからぬ伝説

そんな不思議の町

読書娘な私としては不思議のアリスを思い浮かべるのだけど

「はてさて、迷い込んだのは誰なんだろう」

なんて

すこし少女幻想すぎたかもしれない

まるで、白馬の王子様を待っているかのよう

そういえば

「あのときのネギ先生・・・」

かつこよかったなあ

まるで、それは御伽噺に出てくるような

「!!!??ま、まさか!?あ、あわ、あわわわわ!?」

まさか!?わ、私!

「ネギ先生の・・・事・・・」

その思考の先を垣間見た瞬間

私の思考はオーバーヒートした。



職員室

「ふう……」

僕は一息つく

教職、というのは大変だと聞いていたけれど

「これはたしかに大変だよ・・・」

生徒達の顔と名前、それぞれの成績及び得意分野苦手分野の傾向

それを考慮し授業内容を作り上げ尚且つ生徒を退屈させぬようにしなければ彼女らは授業そっちのけで騒ぎ出す

教職で一番大変なのは生徒へのネタだと思った今日この頃だった

まあ全然違うのだがいかんせんネギは十歳

いままで仕事というものを知らないで生きてきたのだ

「しかし・・・」

たしかに教職は大変だがとてもやりがいのある仕事だと、ネギは思った

新田先生はこういつていた

『我ら教師にしてみれば生徒というのは何百人と居ますし毎年変わります』

しかし、彼ら生徒にしてみればその貴重な一年を学ぶ教師は一人しかいないのです』

故にこそ、我ら教師は生徒を想い、想い、想う。と

とても含蓄のある言葉だと思った。

同時に

新田先生の生徒達への愛も知った

だから

「僕も彼女らを愛さねばならない、ですね」

彼女らは少なからず僕に親愛を寄せてくれているようだし

「愛には愛を、これ常識だとアーチャーが言っていました」

かの弓兵はそんなつもりで言ったわけではないのだが（少なくともネギは愛されたら愛さなければならぬと受け取っている）

「とりあえず」

ネギは生徒名簿をめくり

「顔と名前を再認しましょう」

こうして魔法先生は教師としての道を邁進していく

その裏で

闇は胎動していた。



## ログハウス

日の差し込むうらかな家屋

ソファや本棚に飾られた人形達がこの家を彩っていた

西洋の人形たちだろう、金、銀、青などさまざまな髪の色をもち

瞳は光を反射して輝いている

どれもこれもが一級の品で高価だということが素人にもわかるほどの一品だが

その家の主は、それらの人形では届かない美しさを放っていた。

日の光を浴びて煌く金髪、全ての宝石を凌駕する蒼い瞳

ある者は『最美の芸術』ある者は『薔薇姫』

またかの者は『狂気の姫君』などと称えた彼女

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルはソファに腰掛けていた

その美しき金色の髪を惜しみなく広げ

しかし蒼い瞳は憂鬱そうに

そんな彼女は

いまにも壊れそうな、幻想的な儚さを宿していた

「……茶々丸」

己が従者を呼ぶエヴァンジェリン

「イエス・マスター

紅茶のご用意を致します」

時間、天気、表情などから指示されるであろう行動に出る従者  
茶々丸

間接部には球体間接、頭部にはアンテナとロボット      ガイノイド  
である彼女は完璧な従者を目指している

「いや、紅茶はいい

少し、昔話をしたくてな」

「?かしこまりました」

そういい、記録レコーダーを停止する

超鈴音に知られないため密かに組み込まれているものだ

茶々丸自身その仕組みがどういうものかは知らないがエヴァンジェ  
リン曰く

『とある男と旧知の仲でな、頼らせてもらったんだ』

とのことだったので深く詮索はしなかった



紅茶を断られて実はすこし傷ついている茶々丸だった。

「なに、昔話といつても

ただの殺人鬼と・・・」

ただの世間知らずな小娘の茶番劇だよ





もう何百年も前

とある町にて、私は『鬼』に出逢った。

殺しは殺され、追われは追い返す

そんな生活に慣れてきた頃だった。

そこは燃えていた

赤い杭のようなもので蹂躪されたその町は

私にひどく安心感を与えたのだ

全てを蹂躪され吸い尽くされ杭　　棘の森と化していた

まるで

「吸血鬼の巣だ・・・」

そんな惨状の中で

一人立っていたのが彼だった

白銀の髪を揺らし赤い瞳を天に向け

白貌を歪ませ嗤う鬼

「ククク・・・アヒヤヒヤヒヤヒヤ！！！！

オイオイ、なんだよこれハア？

三十秒もモタネエのかよ、まったくもってクソの掃き溜めだな」

この世界は

「ああ？なんだお嬢ちゃん」

目が合いゾツとした

私は慌てて構えて

「いや、とんでもない魔力を感じたから来ただけだ」

そう

ここに来たのはそれが原因

不意にとても危うい香りのする魔力を感じとんできたのだ

「私は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ

その・・・」

素直に素性を明かし敵対意思がないことを示そうとしたのだが

吸血鬼であることは、やはり私には辛かったのだろう

言いよどんでしまった

だが

「真祖の吸血鬼だろ？知ってるよ、お嬢ちゃん

真なる祖、闇の魔物にして闇の帝王

すべてを吸い尽くし、全てを壊す不死の王

カカツ！！！！」

そこまで言っただけ言葉を切った彼

私は愕然とすると同時に警戒した

私を吸血鬼と知っていて驚かず尚且つ嗤うなど

賞金稼ぎくらいしか知らなかったから

でも

心のどこかで思っていた

誰か・・・

「で？お嬢ちゃんそれがどうかしたのか？」

ああ

ああ

私は何百年経ってもこの瞬間を忘れることはなかった

初めて私を受け入れてもらえた時だったから

たとえソレが

憎悪の思い出に変わろうとも

私にとって、とてもとても大切な思い出には違いないのだから。



## 第六話「少年の証明」

放課後

明日菜さんと僕は寮の部屋で向かい合っていた

どうにも明日菜さんは僕が彼女の教師であることが嫌なようで

それは授業中やその他もろもろから見とれてしまったのだけど

「で、ネギ

私肝心なこと聞いてないんだけど」

「？肝心な事とはなんででしょうか？」

何か話していないことはあったかな？

魔法が隠匿されてることや僕がここで先生をやっている理由も話したのだけれど

「なんでアンタはそんなに急いでるの？」

魔法がどんなものかはわからないしどれくらいで学べるものかもわからない

魔法使いにとって課題ってのがどんな扱いなのかもわからないけど

少なくともアンタみたいな小さい子供が正式な魔法使いとして認められるかどうかの試験を受けれるほど簡単なものじゃないと思うんだけど」

？

微妙にニュアンスが伝わりづらいが

そこは明日菜クオリティ

「そんなことはないですよ？

僕の幼馴染のアーニヤだって僕より一年魔法学校に在籍していましたが僕より一つ年上なだけですし」

たしかに僕より小さな子供はいなかったような気がするけれど

別に早いことはないと思う

「そういうことじゃないの

私はアンタの課題が『日本で教師をする』ってというのがおかしいと思うてるの

ちなみにその幼馴染の課題はなんだったのよ？」

「アーニヤの課題はロンドンで占い師をすること、でしたけど」

「ほれ見なさいな」

明日菜さんはジト目で僕を見て

「いい？アンタとその幼馴染の課題は『次元が違う』」

まず第一に場所

ここはアンタにとって異国の地

本来なら言語もわからないはずの場所なのよ？

でもその・・・アーニヤだっけ？その子はロンドン

ロンドンってたしかアンタの国よね？」

「はい、そうですが」

答えながら明日菜さんの感じるいわゆる違和感に得心する

たしかにそうなのだ

僕とアーニヤの課題はたしかにレベルが違う

「でも、僕にとって日本はそこまで離れた国というわけでは・・・」

「え？そうなの？」

「はい、僕に戦い方の基本や外で生きる上での最低限を教えてください  
た人は日本人でしたし」

普段から日本のことを教えてもらっていたので、特別苦勞はしてい

ません」

僕はアーチャーのことを思い出して言う

「ふうん……」

でもそれでもやっぱりさ

教師と占い師じゃ全然違うでしょ？」

あ

「そこはたしかに……」

でもそれは

「たぶん、僕の目標とアーニヤの目標の違いだと思います」

そう

結局は僕とアーニヤの『次元が違う』

別にアーニヤを見下している訳ではなくましてアーニヤを弱いと思  
っているわけでもない

というか彼女は十分一般魔法使いと同レベルかそれ以上だ

伊達に1年飛び級しているわけじゃない

ただだんに

僕が異常なだけなのだ

「え？そうなの？」

ていうかそんなんでこんなに課題に差がでるものなの？」

そんなのって・・・

「全然違いますよ！」

たとえばですねえ山を登るとき頂上が目的なのと途中までが目的なのでは覚悟や計画が違つてしょう？」

ああ、と納得した様子で明日菜さんは

「そっかそっかアンタとそのアーニヤの目標が違つからか・・・

とこころで・・・」

と、明日菜さんはそこで言葉を区切り

「アンタの目標ってなんなのよ？」

そう

僕を異常たらしめている目標

アーチャーにもネカネ姉さんにもアーニヤにも言われたことの源泉

僕が立派な魔法使いになろうと思った感情の根源

「僕の目標は、父さんを探し出すことです」

あの日

僕をさっそうと助け出してくれた父さん

その父さんに憧れ、焦がれ、そして追い続けるために

「お父さんを・・・？」

どういうことなの、ソレ」

「はい、僕のお父さんは昔　僕を助けてくれたんです

その時初めて会った父さんの背中を、僕は「

ずっと、ずっと追いつけている

「そのために、僕は魔法使いになったんです

あの背中を追いつけて

そして、いつかあの人に会うために」

「そっか・・・なら」

明日菜さんは目を閉じて微笑みながら

「協力してあげる、子供一人じゃ大変なもの

それにね・・・ネギ」

あ

明日菜さんが僕を名前で・・・

微笑みながら僕に近づき

ギョ

「アンタを見てるとほおっておけないの

まるで私の中のなにかがアンタを守れってそう言ってるような

それにね・・・」

そういつて僕を離し

「アンタほつといたらまた誰か脱がせそうだしね」

僕は崩れ落ちた

「ア、アスナさん！僕は誇りある英国紳士です！

そんな女性をポンポン脱がすような変態ではありません！！」

「私の服を脱がしたのはどこのどいつよ！

英国紳士が聞いてあきれろわよ！」



変態と言つ名の紳士という言葉が実はあるのだが

あいにく二人にその手の知識はなかった

「あ、あれはっ・・・！」

「・・・ん？なんででしょうか外が騒がしいですね」

ダダダと誰か走り回っているようだ

なんだろう、と僕が確認しようと立ち上がると

バン！と扉が勢いよくあけられて

「ネギ先生！まき絵が・・・まき絵が！！」

桜通りで襲われたと

僕と明日菜さんはすぐに保健室に向かった。

第六話「少年の証明」（後書き）

はい

いきなり原作を飛ばしました

まあ黒蛇さんが活動したからですね

前話でUGが二月はかかるといっていましたが

基本彼は甘いです

そういうところも表現したかったので二月としたのですが・・・

わかりずらかったですかね・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1648o/>

---

英雄達の恐怖劇

2010年11月2日21時50分発行